

## 田中下遺跡第3次調査



2006.3.31  
長野県上伊那郡宮田村教育委員会

## － 目 次 －

はじめに.....	1
I 調査にいたるまで.....	2
1 遺跡の位置と環境.....	2
2 過去の調査結果.....	3
3 調査の経過.....	4
4 調査組織.....	4
5 調査の方法と報告書作成.....	4
II 調査結果.....	6
1 検出された遺構.....	6
2 繩文時代の遺構と遺物.....	6
3 古代の遺構と遺物.....	17
4 中世の遺物.....	21
5 所見.....	21
報告書抄録.....	22

## はじめに

宮田村町一区の西端に位置する田中下遺跡は、縄文時代から近世までの遺物が採集され、

発掘調査で縄文時代後晩期の土製耳飾りが多く発見された遺跡として知られている。

今回の村道付替工事に伴う調査では、縄文時代前期の住居址1軒、土壙3基、古代の掘立柱建物址1棟と、縄文時代と古代の溝の痕跡3箇所が発見された。

特筆されるのは、縄文時代前期の土壙から、磨製石斧と畿内系の土器が副葬品と考えられる状態で出土したことで、そのことから、それを含めた2基の土壙は墓であると判断したわけであるが、とりわけ、土壙上層の壁近くに、立てた状態で出土した2点の磨製石斧は、埋葬にあたって、何らかの儀礼がおこなわれたことを想起させるものとして注目される。



# I 調査にいたるまで

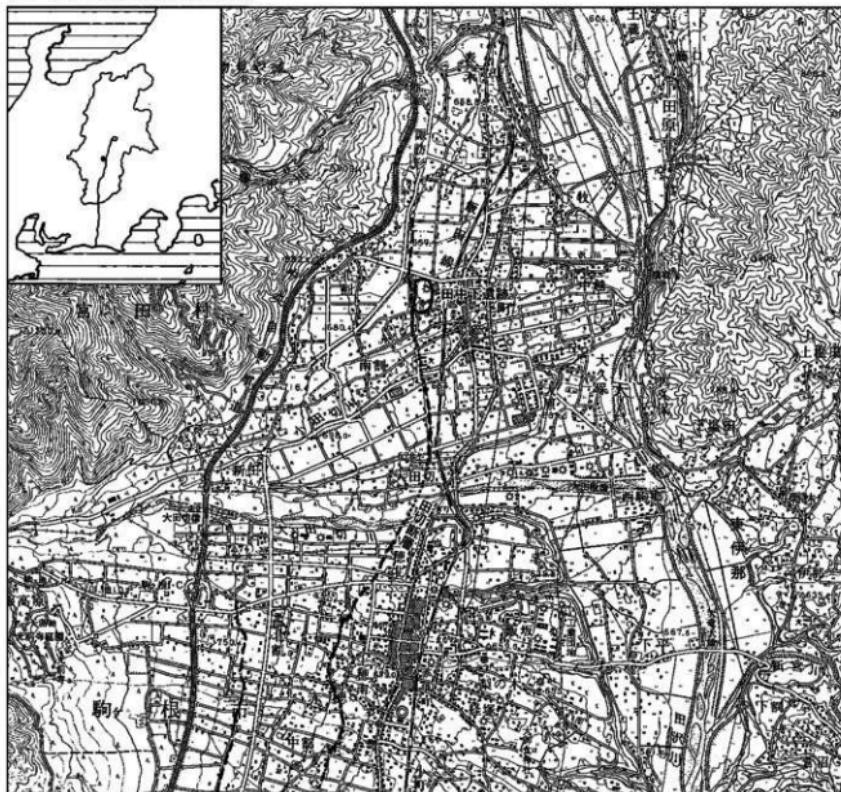
## 1 遺跡の位置と環境

宮田村の平地は、山麓断層によって天竜川右岸に形成された低地へ、木曾山脈から注ぐ大田切川が運んだ土砂によって形づくられた扇状地の、左側部分である。

この平地は堆積後、流路を変えた大田切川によって二次的に開析された、北から大沢川、小田切川、大田切川の河原となっている低地と、その間の2つの東西方向の長峯状の台地とに分かれている。さらに北端の大沢川の低地には、北西の山地から流れる小河川によってもたらされた土砂によるいくつかの小さな扇状地のうちの、一番北端の長坂沢と宮の沢などによって形成された少しきめの扇状地が、大沢川の水を堰き止めたため、その上流に広い「すぐも地帯」が形成されていた。昭和40年代の後半からおこなわれた圃場整備事業によって、平地部の微地形は大分変わってきていている。

田中下遺跡は、大沢川と小田切川の間の尾根の北縁に位置している（図1）。尾根のほぼ中央を南北に田切断層が走っていて、西が高く東が低い段差が形成されているのだが、そのすぐ東ということになる。遺跡の範囲は東西180m、南北300m。南に接して田中南遺跡、西に接して田中上遺跡、向山遺跡と在家遺跡があり、東西

図1 田中下遺跡位置図(1:50000)



550m、南北500mの範囲を一体の遺跡としてとらえることも可能である。

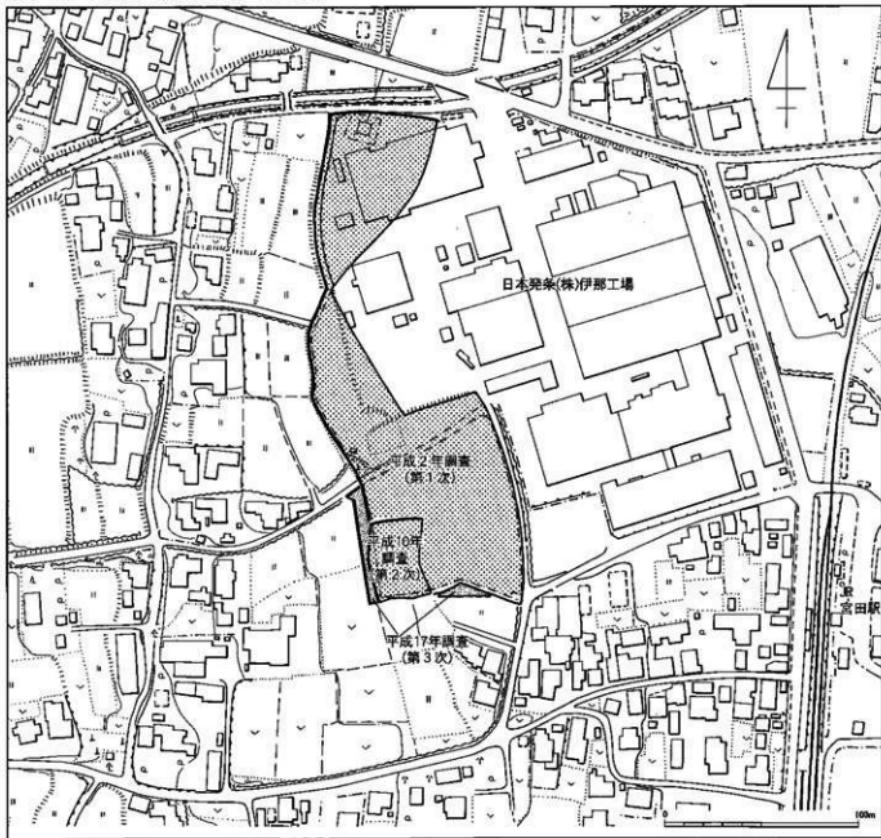
遺跡地は、ほぼ中央を東西に走る道を境に北が一段低くなっている。過去の調査で漆黒色土が堆積したことが確認されていることから、その一帯はある時期低湿地であったと推定される。一方で南半分では、表土下の遺物包含層を覆う黒色土がかなり厚く、溝状の地形を水が流れたり、広い範囲が砂に浸された痕跡が見受けられるなど、台地状ではありながら、西方からの水によって何回か土砂が流れのような場所であったようである(図2)。

## 2 過去の調査結果

田中下遺跡では「宮田村誌」を編纂していた昭和50年代に、- -帶で表面採集をおこなっており、弥生時代から古墳時代を除く、縄文草創期から近代までの遺物が採集されている。

その後、平成2年と平成10年に、東に接する工場の増設や駐車場整備に合わせて発掘調査を実施している(図2)。平成2年の調査では北側の一段低い地点で縄文後期から晩期の集石構造や土壌と、土器と石器、58点

図2 田中下遺跡第3次調査地点図(1:2500)



の土製耳飾りなどが、南側で縄文前期の住居址1軒と約30基の土壙、平安時代の住居址2軒が発見されており、平成10年の調査では奈良時代末から平安時代初頭の住居址5軒と掘立柱建物址1基が発見されている。

この2回の調査から、北側の縄文後晩期の遺跡は、遺物密度が濃く、部分的な調査ではあるが多量の土製耳飾りを伴とする櫛を集めた遺構を想定できる。一方で、縄文前期と平安時代の遺構の密度はさほど濃くなく、集落が営まれた期間は、いずれも短期間で終ったようである。

### 3 調査の経過

平成17年度に実施された第3次調査の、現場における調査の経過は以下のようである。

- 8月15日 宮田村長清水靖夫より村道118号線の付替工事に伴い、土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知が提出される。  
(県教育委員会より発掘調査の指示。)
- 9月1日 現場における発掘調査準備を始める。調査区域を東(A地区)、西(B地区)、の2地点とする(図2)。
- 8日 A地区から表土はぎを開始する。遺物包含層が希薄であることからB地区南側まで継続する。
- 15日 測量のための基準点を設置する(附ナカタに委託)。
- 16日 作業員によりジョレン掛けを始める。
- 21日 B地区で掘立柱建物址を検出する。
- 23日 掘立柱建物址の記録を作成し、A地区とB地区南側の調査を終了する。
- 26日 稲の刈り取りを待ってB地区北側の表土はぎを始める。
- 29日 4号溝址、5号溝址の調査を始める。
- 10月5日 9号住居址の調査を始める。
- 19日 51号土壙の調査を始める。
- 20日 52号土壙の調査を始める。
- 21日 B地区北側の調査を終了する。
- その後、整理作業を経て本報告書を刊行するに至る。

### 4 調査組織

調査に係る組織と、現場作業と整理でお世話になった作業員の皆さんには以下の通りである。

◇宮田村遺跡調査会 ◇事務局(宮田村教育委員会)

会長 本田 秀明	教育長 新井 洋一
太田 保	教育次長 大沢 啓子
平沢 和雄	生涯学習係長 中塚 藤男
白島 剛	文化財主任 小池 孝
加藤 勝美	
小田切 洋	

◇作業員

池田 陽子、植田 尚美、長内由紀子、唐木 達雄、唐木 三夫、唐木 雄三、杉本 美咲、
谷 和子、松下 末春

### 5 調査の方法と報告書作成

過去2回の調査では、地形に合わせた任意の点を基準としてグリッドを設定してきた。今回の調査では世界測地系座標X=-25668.00、Y=-50944.00を南西の基点として50m方眼の大区を設定し、その中に2m方眼のグリッドに分け、それぞれ、A大区の東をB大区、北をC大区、グリッドは東から西へAからY、南から北へ01から25と呼んだ。2m方眼のグリッドはAA01など、アルファベット2文字と2桁の数字で表現されること

になる。遺構検出前と遺構外から出土した遺物はこのグリッドによって地点を特定しながら、遺構内の遺物は、特別なものを除き遺構単位で一括して取り上げた。現場での平面形の記録はすべて平板測量でおこない、整理作業での遺物実測は手作業によった。現場での実測と写真撮影、整理作業での遺物実測、トレースは小池があつた。

報告書の遺構実測図は1:60を、遺物実測図と拓影図は1:3を基本とした。個々についてはスケールによられたい。遺物の図中のスクリーンは、ことわらない限り赤色塗彩部分を示す。

出土した遺物と調査資料は宮田村教育委員会が保管している。



A地区調査前



B地区調査前(南より)



B地区調査前(北より)

## II 調査結果

### 1 検出された遺構

今回の調査は道路の付替工事に伴うものである。用地のうちに平成2年と平成10年に調査を終えた部分があり、その南と西に接する2箇所を調査した(図2)。このうち東のA地区からは遺構は発見されず、西のB地区南側で縄文時代に埋没した溝1基(3号溝)と古代の掘立柱建物址1基(2号掘立柱建物址)を、同地区北側で縄文前期の堅穴住居址1軒(9号住居址)と土壙3基(51~53号土壙)、縄文中期に埋没した溝1基(5号溝)、古代に使われたと判断した溝1基(4号溝)を検出した(図3)。包含層から少量の縄文前期と古代の遺物と、ごくわずかの縄文中期の土器片、内耳土器などの中世の遺物が出土している。



A地区調査後

### 2 縄文時代の遺構と遺物

#### 1) 9号住居址(図4)

B地区の北西隅に発見された。ほぼ半分が用地外、一部が現道下になるため調査しない。規模等は推定だ

図3 田中下遺跡第3次調査  
B地区遺構分布図

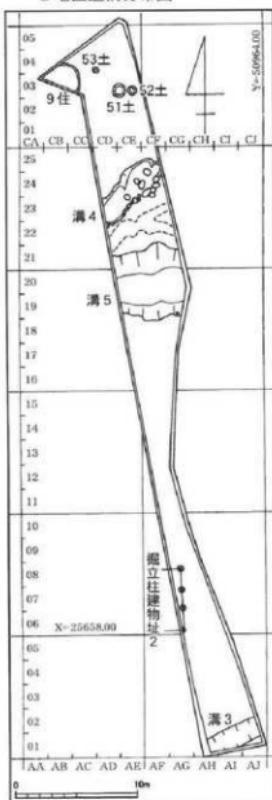
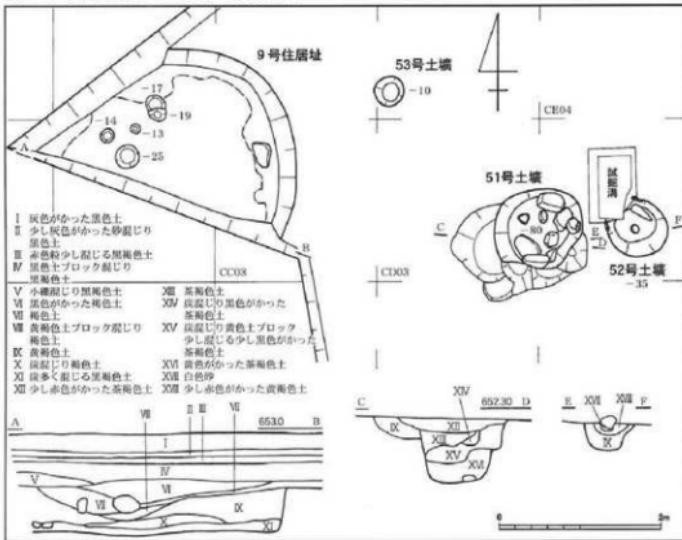


図4 9号住居址、51~53号土壌実測図

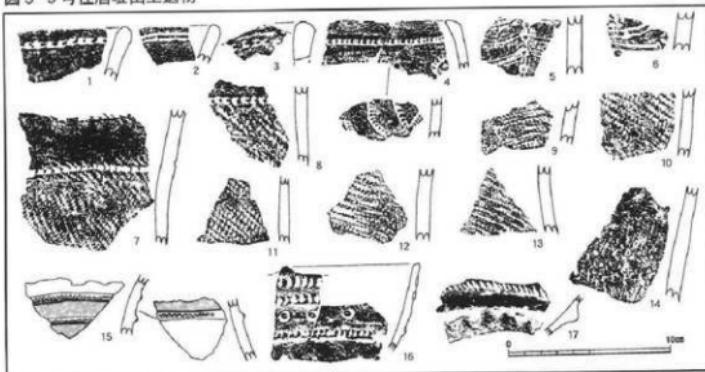


## 縄文時代前期の遺構検出状況

が、径3mほどの小形の竪穴住居址である。埋土は上層は黄色味が強く、床直上には、全面に黒味の強い炭化じりの土が堆積していた。床面に焼土や焼けた痕跡はない。床には壁下の部分を除く全体に粘土質黄色土が貼られている。貼り床は部分的に2枚確認されたものの、面として明瞭に把握することはできなかった。建て替えの有無についても確定はできない。竪穴内にも外部にも柱穴は発見できず、炉は用地南に地床炉を想定した。

遺物は少なく、縄文前期後業（第IV期）－「長野県史」の縄文前期土器の時期区分（以下同様）－の在地系土器片45点（図5-1～14）、関西系土器片10点（15～17）と、黒曜石類の小剣片5点が埋土から出土している。諸磯a式併行期の住居である。

図5 9号住居址出土遺物



9号住居址貼り床検出状況

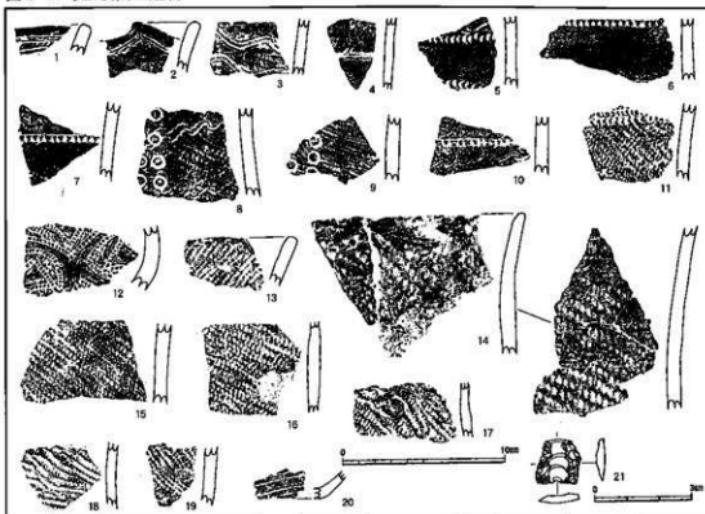


9号住居址調査完了

## 2) 51号土壙(図4)

9号住居址の南東3mで発見され、110cm×100cm、検出面からの深さ80cm、東西に主軸をおく小判型を呈する。埋土の中層を中心に縄文前期後葉(第IV期)の在地系土器片が60点(図6-1~20)と比較的多く出土し、ほかに製作時に先端を欠いた石鏃(21)と9点の黒曜石の剥片類が出土した。その中に53号土壙に埋められていた畿内系土器(図9-1)の破片の3割ほどが含まれており、同土壙との強い関連性が想定される。

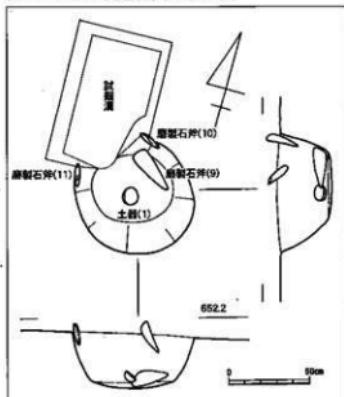
図6 51号土壙出土遺物



### 3) 52号土壙(図4)

51号土壙の東に位置する、径70cm、検出面からの深さ35cmの円形の土壙である。完形の磨製石斧3点(図8-9~11)と丸底の土器底部(1)が出土した。3点の磨製石斧はいずれも緑色片岩製で、そのうち、大形(長さ31cm)の1点は土壙底の北東の壁に横たわる状態で埋められており、他の2点の磨製石斧は土壙底から40cm上に上端がくる高さで、北の壁際のものは刃を上に、西の壁際のものは刃を下に、共に立てた状態で発見され、一方土器底部は、成形時の、底部と胴部との粘土帯の接合部から上を欠いたもので、小さなお椀状を呈し、土壙のほぼ中央の、底から5cm上の高さに、東へ傾いた上向きで発見された(図7)。平行沈線に重ねた

図7 52号土壙遺物出土状態図

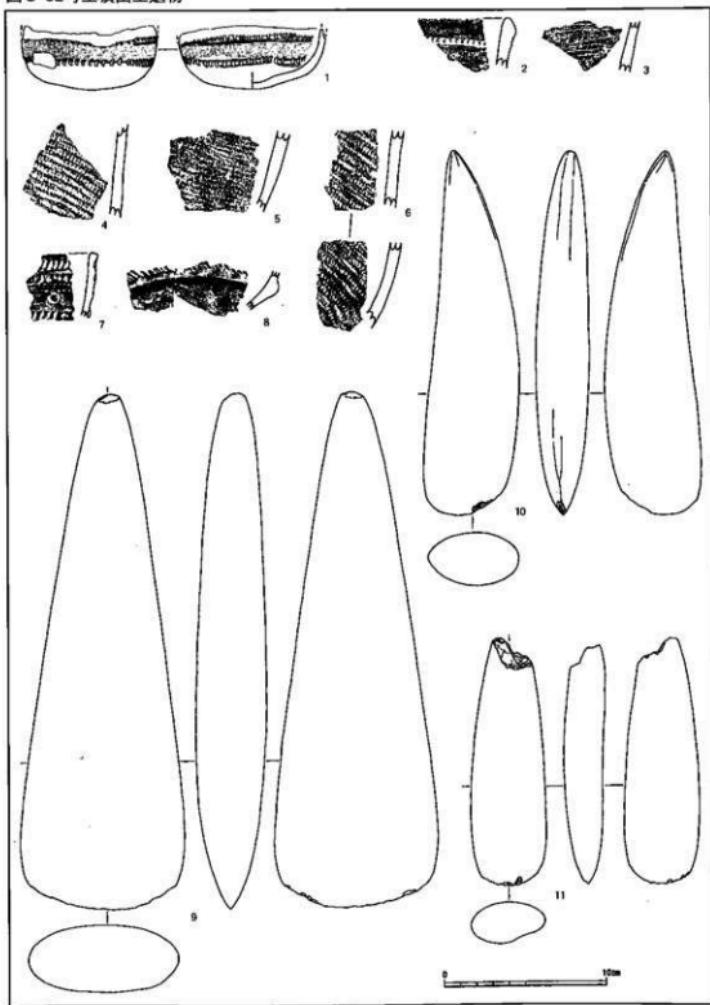


爪形文を横位に2段施し、間を赤色顔料で塗彩した、縄文前期後葉の畿内系、北白川下層II式土器である。この土壙は肉眼による埋土の判別が難しく、9号住居址の検出面からさらに10cmほど掘り下げ、2点の磨製石斧が土中からまっすぐ出る状態になつてもまだプランを決定できず、試掘溝を設けて造構下部の状況を見てようやく土壙であると判断した。従って造構上面は、造構検出作業を止めた面から10cm以上上であり、10、11の磨製石斧もすべて土壙内部に含まれていたものと判断している。

4点の遺物は埋土に混じって出土する土器片などとは異なり、明らかに造構内へ埋め置かれたものであり(上層の2点の磨製石斧は土壙を埋める最後の段階に置かれたか、土壙を埋めたあと、打ち込んだことになる)、死者の埋葬にあたって墓の中へ入れられた副葬品であると考えられる。

埋土にはこの4点の遺物のほか、縄文前期後葉(第IV期)の在地系土器片23点(図8-2~6)と関西系土器片2点(7、8)が混じっていたが、後者の同一個体が9号住居址埋土からも出土しており(図5-16、17)、土壙に遺体を埋葬した時期を知る一つの手がかりとなろう。

図8 52号土壤出土遺物



#### 4) 53号土壤(図4)

9号住居址の東1.4mで発見された、径20cmの小形のピット状の土壤である。検出面からの深さは10cm。縄文前期後葉(第IV期)の畿内系土器(図9-1)と縄文地文の在地系土器の大破片(2、3)の合わせて3点が出土している。畿内系土器は破損した土器の口縁から頸部の部分的な破片を集めたもので、51号土壤と、周辺の包含層からも同一個体の破片が発見されている。意図的に集めて土壤内へ埋めたものと判断される。

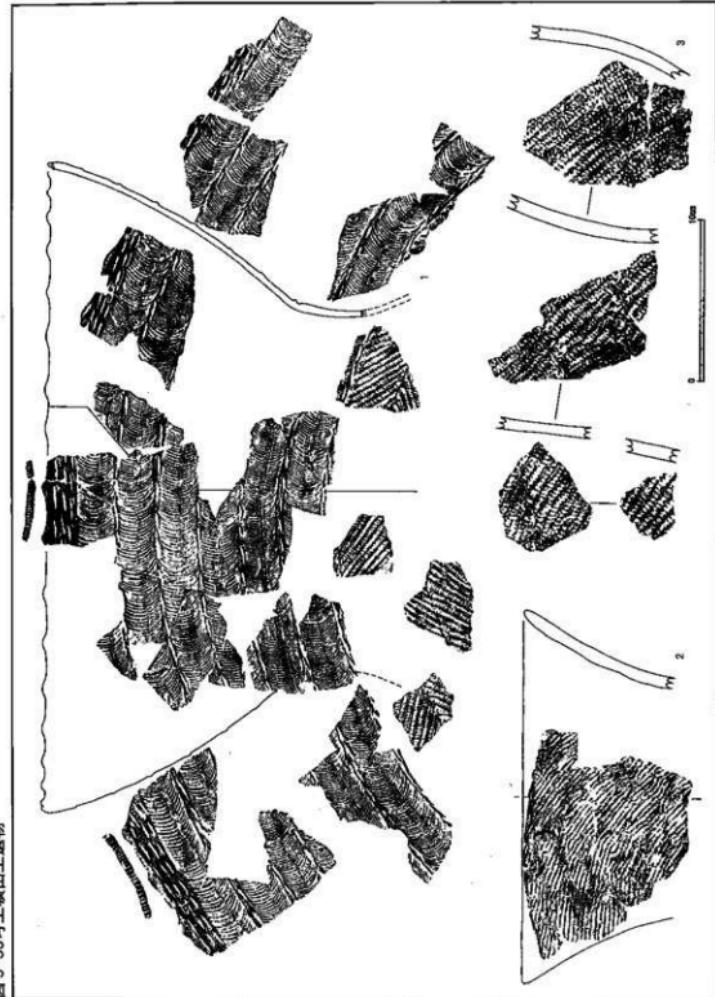


図9 53号土壤出土遺物

今回の調査で検出された3基の土壙は、9号住居址内部に柱穴といえるピットが発見できなかったことから、住居址周辺を、遺構検出面から10cmほど下げたところで検出したものである。縄文前期の遺構は、まだら状の黄褐色土の中の「少し赤味をおびた均質な感じを受ける範囲」というわずかな違いでしかとらえることができなかつた。従つて、住居址のように規模の大きい遺構は平面形を線引きできたが、小さな遺構だと、ある程度遺構の上層を削り込むことになったわけで、結果として土壙を確認したのは縄文前期の生活面よりもかなり下であったと認識している。主体となる土器はすべて前期後葉の初め、諸磯a式併行期のものであり、住居址との間に時期差は認められない。



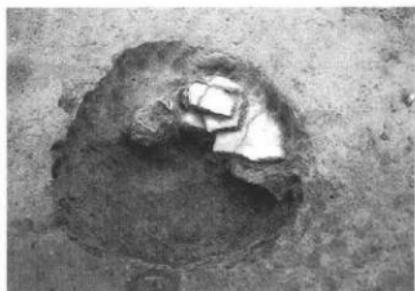
51(左)、52(右の石の下)号土壙



51号土壙



52号土壙



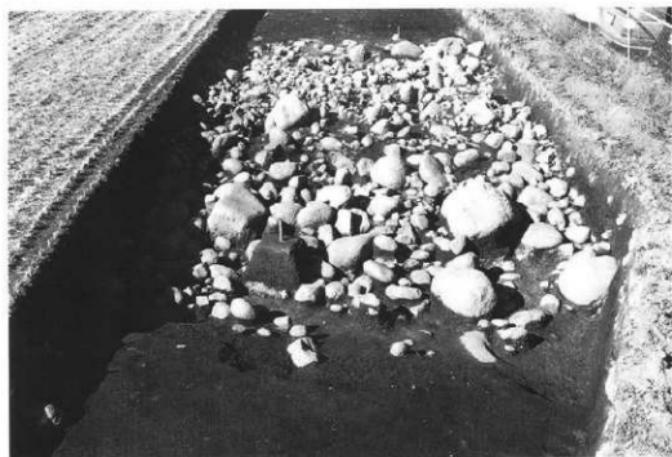
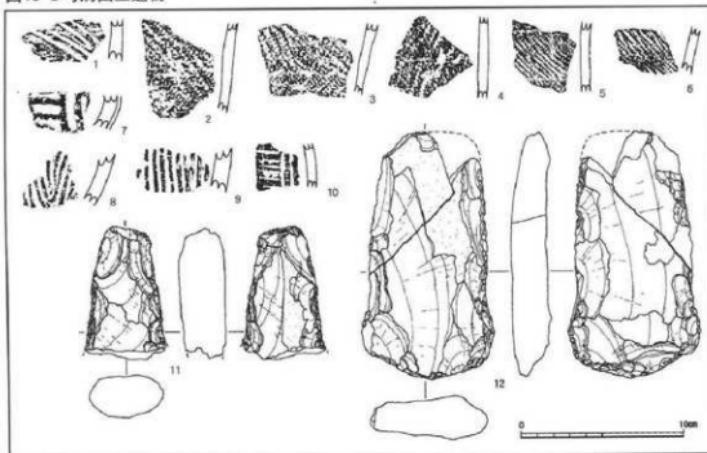
53号土壙

## 5) 溝

今回の調査で縄文時代に埋まつた溝が2つ発見された。

B地区の南端の3号溝と北端から20mの5号溝(図14)で、遺跡地に限らず、台地の地下数十cmから1mの下には、大田切川の礫が厚く堆積しているわけで、その礫中に多くの水道があることは容易に想定でき、調査地点の西方100mにある田切断層に歸因する自然の流路であると判断した。前者は埋土を掘り下げなかったので細かい時期は特定できないが、後者は4点の土器片(図10-7~10)から、縄文中期後葉に埋没した可能性が高い。

図10 5号溝出土遺物



5号溝

## 6) 包含層出土の遺物

住居址と土塙が発見されたB地区北端にやや多く、ほぼ調査した全城から縄文時代の土器と石器が発見された。土器はごく少量の中期初頭(図11-32, 33)のほかは前期後葉で、石器のうち礫群に混じって発見された大形のものの中に、製作途中に破損して廃棄されたと見られるもの(図12-6, 8)がある。

図11 遺物包含層出土縄文時代の遺物(1~5 4号溝内、6~30 B地区、31~33 A地区)

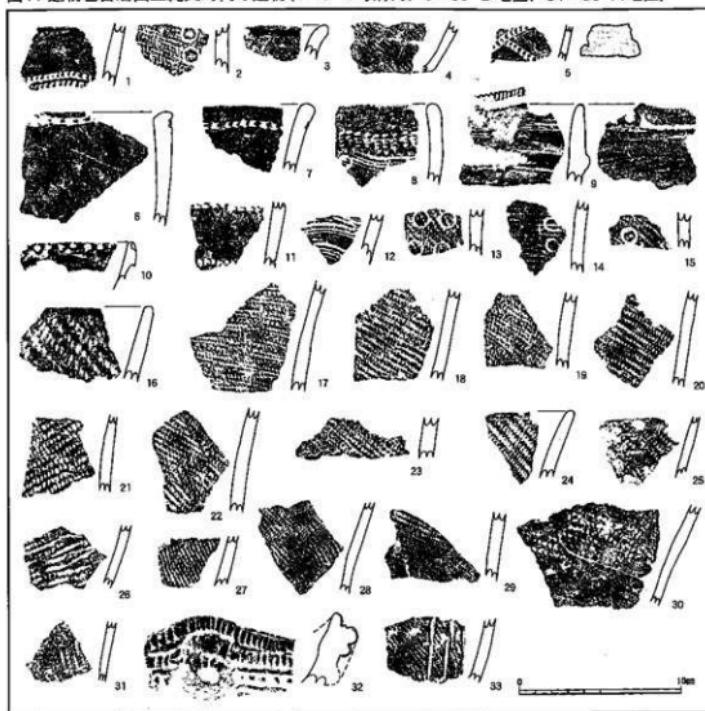
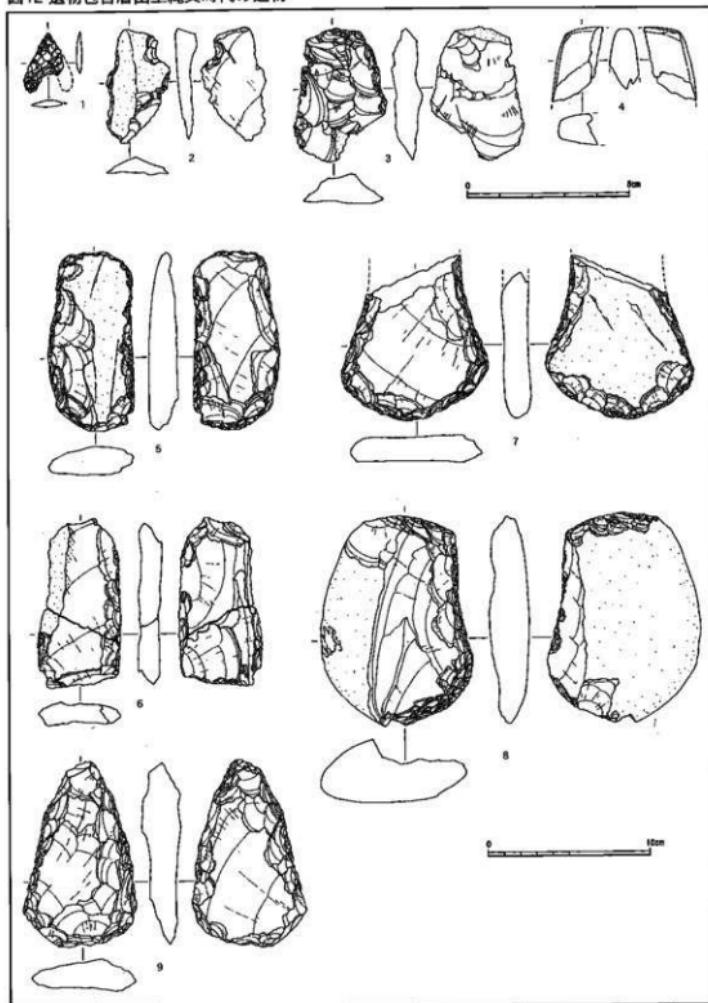


図12 遺物包含層出土縄文時代の遺物



### 3 古代の遺構と遺物

#### 1) 2号掘立柱建物址（図13）

B地区の南側、西壁近くに径20cmの4本のピット（P<sub>1</sub>からP<sub>4</sub>）が、1m65cm間隔で直列して発見され、用地西に主体をもつ掘立柱建物址を想定した。埋土に柱痕跡は確認できなかった。遺構検出時に気付かなかったが、西壁の土層観察の結果P<sub>4</sub>から70cmの用地西壁に、焼土を含むピットがあり、これも建物址に附属する施設である可能性が高い。

柱穴内から出土した2点の須恵器片（図15-1、2）から、8世紀末から9世紀初頭の遺構であると判断した。

図13 2号掘立柱建物址実測図

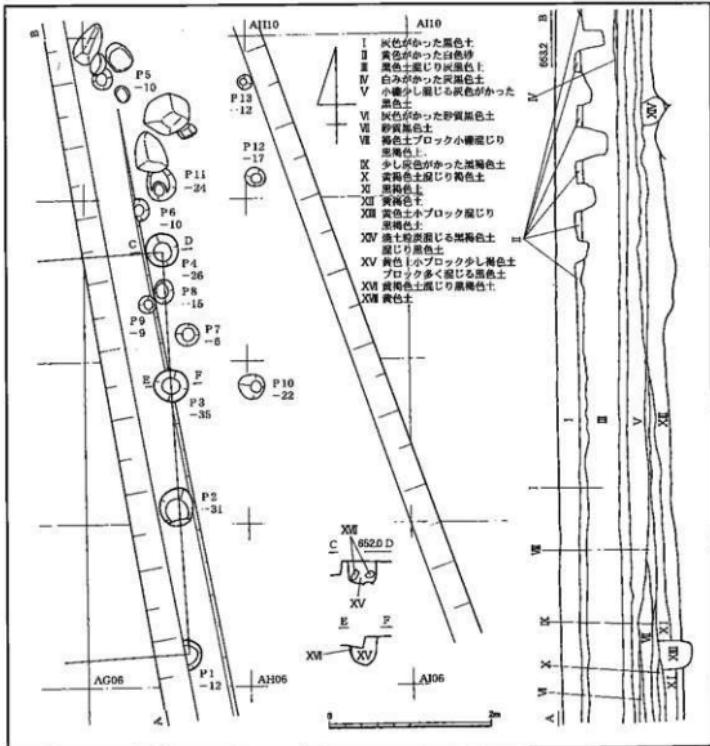
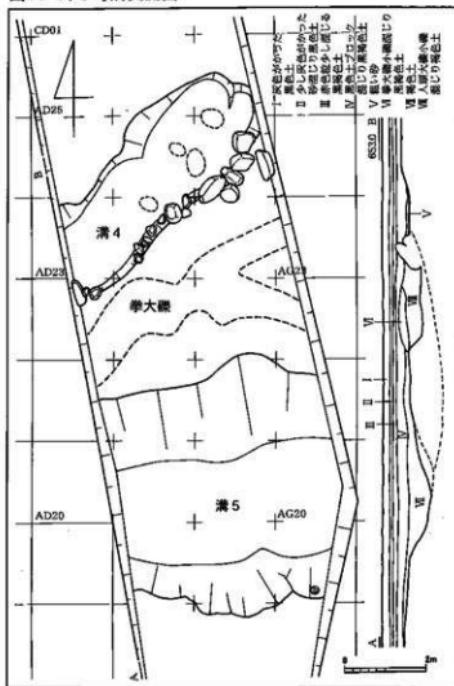


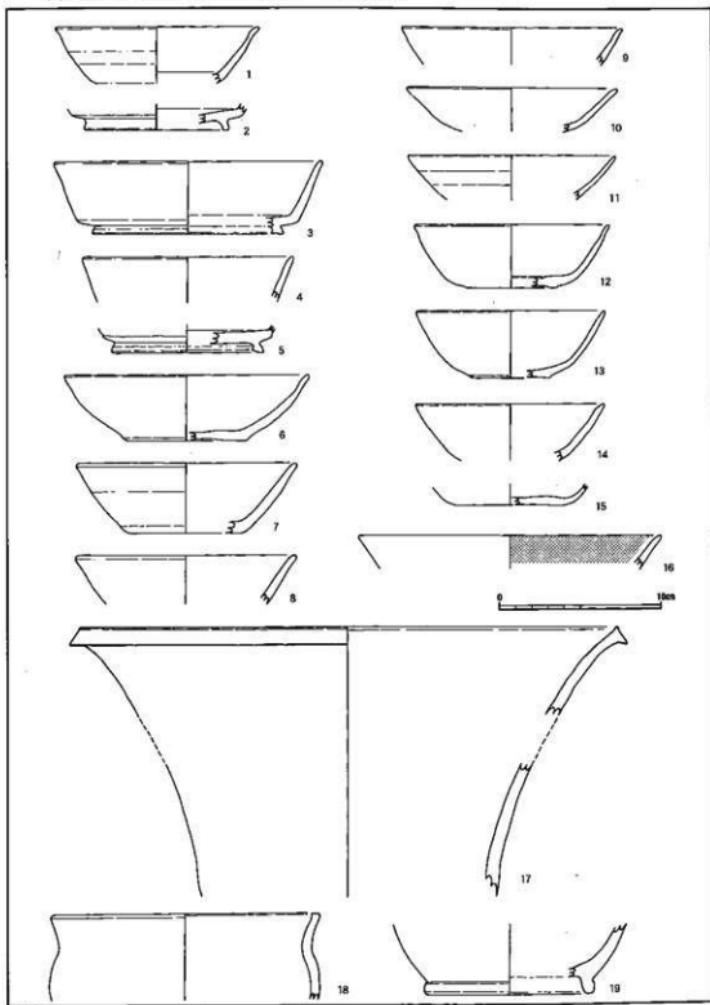
図14 4、5号溝実測図



## 2) 4号溝(図14)

繩文時代中期に埋没した5号溝の北には、4～5mの幅で西から東へ、拳大から人頭大、さらには一抱えもある大きさの大量の礫が折り重なるようにして発見された。これ自体は、中に筋状に集まつた拳大の礫群も受けられ、人工のものではなく、西の断層崖下に湧水があり、それを水源とする流れによって、礫や砂が間欠的に運ばれた結果であろうと判断したが、その北側に、幅1mほどの浅い溝を確認した。4号溝である。粗い砂が底に堆積し、図では、いずれも表土剥ぎの際に重機で抜いてしまったためにその痕跡を破線で示すことしかできなかったが、溝底に大きな礫が顔を出すようにして残されていた。川底のよどみに堆積した砂に混じって古代8世紀末から9世紀初頭の、多くの須恵器(図15-3～15、17、18)と、黒色土器(16)、灰釉陶器(19)の破片が発見されており、南東一帯で発見された同時期の集落と関係する、人の手によって管理された小さな流れであろうと判断した。

図15 2号掘立柱建物址(1.2)、4号溝(3~19)  
出土遺物(16黑色土器、19灰釉陶器、他は須恵器)





古代の遺構  
検出状況



2号樁立柱建物址  
上:左より  
下:北より



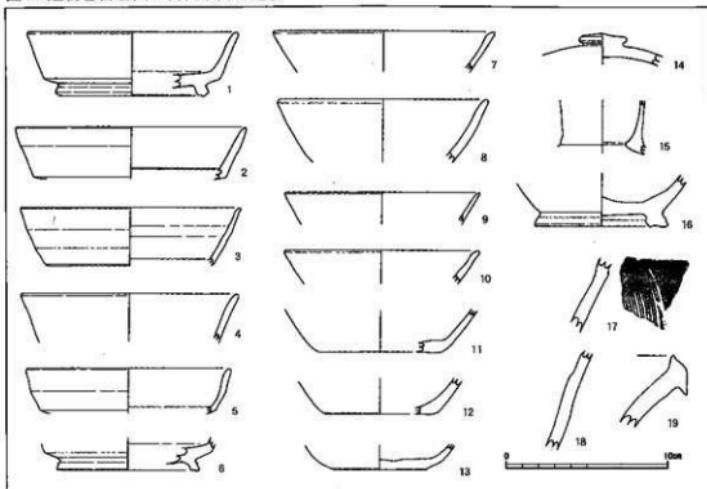
4号溝 北より  
(疊群の手前部分)



### 3) 包含層出土の遺物

過去の調査や今回の調査で発見された遺構の所属する、8世紀末から9世紀初頭の須恵器（図16-1～14）、灰釉陶器（15、16）が出土しているが、特定の場所に集中する傾向は見受けられなかった。

図16 遺物包含層出土古代以降の遺物



### 4 中世の遺物

包含層から、内耳土器（図16-18）、擂り鉢（17）、瓦器（19）の破片が少量出土している。

### 5 所見

縄文時代前期の遺構はB地区の北端に限られ、遺構外の遺物の出土状況を見ても、遺跡の南半分の高い面の、縁から、25m地点に発見された縄文中期以降に埋没した5号溝までの間が集落域と考えられる。集落は散在する住居と墓で構成されているようだ。時期的には長野県史の前期後葉第IV期、諸磯a式併行期に限られ、遺構の密度はさほど濃くない。

51号と52号の土壙は墓であると判断される。墓としては小さい53号土壙は、明らかに中に土器の大破片を埋めてあるが、その理由については解明できていない。

52号土壙から出土した3点の磨製石斧と1点の畿内系土器は副葬品と解される。51号土壙とともに墓壙であるとした根拠である。この場合、大形の磨製石斧と土器底部は遺体の傍らに埋めたと解されるが、上層の2点の磨製石斧は、埋葬の最終段階に穴の縁あたりへ立てるようにして埋め込んだか埋葬後に打ち込んだとしていい状態にあった。葬送に伴う行為を連想させ興味深いが、類例がなく、それ以上の類推はここでは控えたい。磨製石斧のうち、基部を欠く1点以外は、刃こぼれなど使用の痕跡があるものの製作当初の形と大きさを残している。副葬されたのが在地系でない土器であることもあわせて、被葬者の特殊性をうかがわせる遺物群である。

報告書抄録

ふりがな	たなかしたいせきだいさんじちょうさ						
書名	田中下遺跡第3次調査						
副書名	村道118号線付替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
著者名	小池 孝						
編集機関	宮田村教育委員会						
所在地	〒399-4301 長野県上伊那郡宮田村7021 TEL0265-85-2314						
発行年月日	平成18年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
田中下遺跡	長野県 上伊那郡 宮田村 3149-1 ほか	市町村 20388	遺跡番号 6	35° 46' 03"	137° 56' 11"	20050901 ~ 20051021	400m <sup>2</sup>
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
田中下遺跡	集落址	縄文時代	住居址 1 土壙 3 溝 2	縄文土器 石器	縄文時代の土壙のうちの1基から磨製石斧3点、畿内系土器底部1点が埋納された状態で出土した。遺物は副葬品であり、土壙は墓であると解釈される。		
		平安時代	掘立柱建物址 1 溝 1	須恵器			

長野県上伊那郡宮田村  
 田中下遺跡第3次調査  
 村道118号線付替工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書  
 2006.3.31

発行：長野県上伊那郡宮田村7021 宮田村教育委員会

